

155

606

7x.30

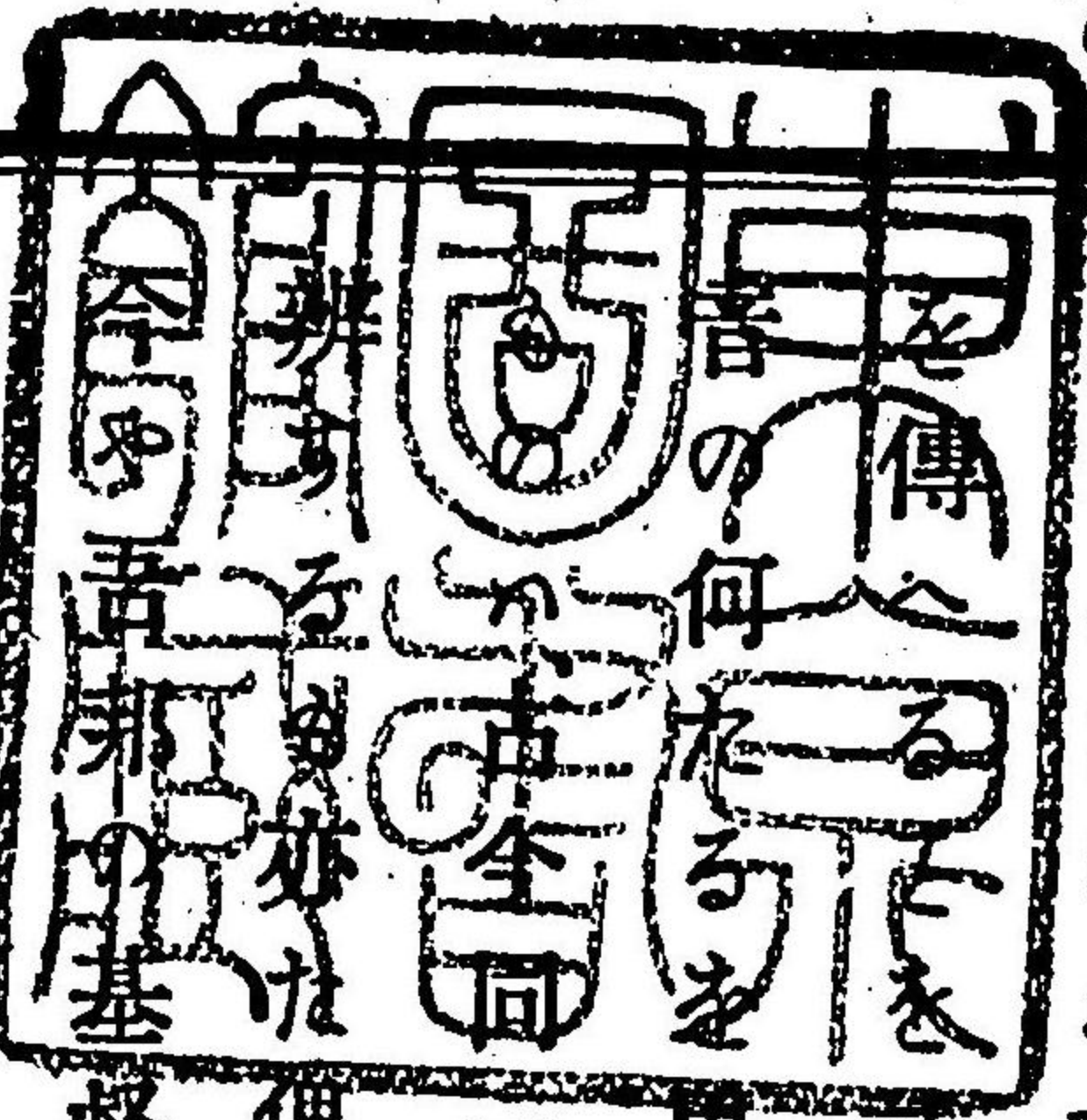
明治廿四年六月出版

蒙啓 基督教概論

池田書店

啓蒙基督教概論序

聖パウロ曰く我儕の勸へ惑より出るにあら
出るふあらざ、亦た詐を以てせざ、我儕神の撰
を傳へるを託ねられたるふ因て語るありと、蓋し福
音の何たるを思ひき、大早計の評論を下して之を誣る



一、萬國異るとなし、聖保羅が是の如く自
然にあらざるなり
偶然にあらざるなり

傳播さるゝと雖も、皮相の解釋者、大早計の評論家が誤
見謬説と違ふするの餘地は滔々たる天下の人心に存

在せざるなし、況や頑愚の守舊家、無智の雷同者流相應
トて喧々たるよ於てや、彼の眞理を求めて路頭よ彷徨
する人、何を以てか彼等の爲に明を失ひ聰を賊ひ以て
安心立命の幸福を得せざして終よ恐懼疑惑に身を終
るなきを保せんや、嗚呼吾人が彼等の爲よ自ら辨ざる
も亦た止と得ざるあり

教友太田孝吉君頃、小冊子を編輯し、名けて啓蒙基督教
概論と曰ふ、編成るや來て余よ序を求む、此書基督教の
深味を解するものよあらざと雖も、また能く平易なる
案内を求道者に與へ、彼等をして頑愚雷同の誘惑を免

きしむる爲よは利益尠少ならざるが如し、實よ著者も
亦た時勢の急務を知る者と謂ふべし、輒ち所思を記し
て聊か著者の囑よ應ぞと云爾

明治廿四年五月中院

眞堂居士識

啓蒙基督教概論目次

- 第一 基督教の誤解者に告ぐ……………一丁
- 第二 基督教は外教にあらず……………十三丁
- 第三 基督信者は外人崇拜者にあらず……………十七丁
- 第四 基督教は不孝の教にあらず……………二十五丁
- 第五 基督教は無氣力の人を造らず……………三十三丁
- 第六 基督教の學問の敵にあらず……………三十八丁
- 第七 基督教道德……………四十三丁

して世間に吹聴し、さなきだに疑心あるものを煽動して胸中に暗鬼を生ぜしむるが如き跡あるを見る、是れ世人が我教の漸く弘く行へるを見て、如何なる大害を生じ來らするとやあらんと痛心するまた所以なきにあらざるなり

大凡新事物に接するときは、これが爲に感觸を刺衝すると甚しきものなるが故に、詳細く觀察を遂げ、然る後取捨すべきは勿論なり、而るに彼等にして、もし江南の犬が雪を見て吠へ、蜀國の犬が月を見てなくが如く、基督教の新奇なるが爲に、徒に妄評を加ふるならば、其誤謬や、其内外表裡を實見せざるに坐するなり、もし然らば天下の事皆奇怪ならざるはなし、豈ひとり基督教のみを云ふへけんや

爰に寓言あり、二人の農夫東と西より來る、甲乙相對して路上に楯あるを見たり、甲曰くわ、何もの、所爲ぞ、此黄金の楯を遺して去れりと、乙

曰く此處に銀製の楯と棄たるものあり、これ誰ぞやと、甲これをさして白く否黄金なり、乙曰く否銀にして金にあらすと、互に論駁して孰か是なるを知らず、これを久して甲は西に乙は東に行き、相願れば思きやこれなん表裡鑄造を異にしたるものならんとは、是に於て甲乙互に自己の粗忽を詫び、相笑て別れたりと云ふ、世の基督教を見るもの、これを察せば自ら悟る所決して少からざるべし

然れども人の見る所各相異なるは、雷に輕忽にのみよるにあらす、感情習慣は常に見る所を異ならしむ、古今集の序中に曰く、秋の夕立田の川に流るゝ紅葉をば、御門のおんめには錦と見たまひ、春のあした吉野山の櫻は、人麿の心には雲かどのみなん覺けると、又明月の皎々たるを見て、月みれば千々にものこそかなしけれ、わが身ひとつの秋にはあらぬと、嘆じ或は明月や今宵生るゝ子もあらんと賞したるものありと

く、されど紅葉は固より紅葉なり、櫻花豈雲と化らんや、明月豈人をして嘆賞せしむる心あらんや、かくの如きはたゞこれ自己の感ずる所によりて、詩歌吟詠の上に其異を生じたるのみ又古書に謂ふ柳下惠は飴を見悦びて曰く、これ老親を養ふに妙なりと然ども盜跖はこれを見て以て爲く鎖鑰を開くに適すと見るべし、孝心ある者には、飴は親を養ふ料となり、盗心あるものには、錠を開く材となれり蓋し先入の妄見習慣に制せられて、見る所求むる所異なればなり、然らば聖パウロが十字架の教は(キリスト教)亡ぶるものには愚なるもの、救はるものには神の能たるなり(哥前一〇十八)と曰ひしは、世人の基督教に對する感情と見る所の相違を云ひ出たるものにして、この相違は昔も今もまた將來にも常に世と共にあるならん

然らば基督教は、たゞ詩人歌客が自己の感情によりて見る所を吟詠するが如く、人によりて神の能となり、或は愚なるものとなるか、否決して然らず、此の如きは人にありて云ふなり、かの紅葉、月花も詩歌の吟詠によりてその性を變ずるものにあらずんば、人の證を求めざる神の大能に於て如何ぞその真相に輕重變化を來すの理あらんや、基督教にしてもしその真相を顯はすとなくんば、沈淪者に隠れたるなり、(哥後四〇三)故に彼等が此新事物に對しながら、先入の妄見を去り、舊慣の範圍を脱せずその内外表裡を見る明なく、その見る所一方に偏し、其位置に立ずして漫に評論駁撃を加ふ、その真相を見ると能はざるも亦宜ならずや、然らば學者を以て自ら任じ、内外諸學術の奧義に達したりとて、もし我教を研究し、これを信する公平の眼あるものにあざれば、決して其見解を以て正當なりと断定すべからず、大凡物は其道によりて賢いと謂ふが如く、農圃の事は孔子も共に語るに足らず、(孔子自ら之を云ふ)彼に

然らず、此の如きは人にありて云ふなり、かの紅葉、月花も詩歌の吟詠によりてその性を變ずるものにあらずんば、人の證を求めざる神の大能に於て如何ぞその真相に輕重變化を來すの理あらんや、基督教にしてもしその真相を顯はすとなくんば、沈淪者に隠れたるなり、(哥後四〇三)故に彼等が此新事物に對しながら、先入の妄見を去り、舊慣の範圍を脱せずその内外表裡を見る明なく、その見る所一方に偏し、其位置に立ずして漫に評論駁撃を加ふ、その真相を見ると能はざるも亦宜ならずや、然らば學者を以て自ら任じ、内外諸學術の奧義に達したりとて、もし我教を研究し、これを信する公平の眼あるものにあざれば、決して其見解を以て正當なりと断定すべからず、大凡物は其道によりて賢いと謂ふが如く、農圃の事は孔子も共に語るに足らず、(孔子自ら之を云ふ)彼に

してまた禮を老子に問へりと云ふ然れば學者なりとて強ち教法を知れりとなすべからず英雄を知るは英雄にあり教法を知るもまたその心を要すもし燕雀の心を以て鴻鵠の志を知れと云はゞ唯その一部のみ況んや神の大能によりて人間に默示せられたる宗教を伺はんとするに於てをや

借茲に予が辨解せんとするとは他にあらず近頃國粹保存とか尊皇奉佛とか種々の名稱を唱へ自己の主義を明すとを務す却て浮説を傳て曰くもし基督教我國に傳播せば上は帝室の尊嚴を欠き下は我國民の元氣を害ふ不幸を來さん豈由々敷大事ならずやと然り果して此論旨の如く基督教を信するが爲に其傾向と結果を來さば吾人日本國の臣民たるもの焉ぞ其排撃に力を盡さざるべけんや然れども吾人は聖書によりて其教義を研究し又基督教の傳りたる邦國の歴史を案じて更

に論者の愛ふるが如きことなきのみならず却て反對の例證あることを知る試に聖書が執權者に對する義務を教ふる主意を示さん羅馬書十三章一節二節に曰く上にありて權を掌る者に凡て人々服ふべし蓋神より出ざる權なく凡そ有どころの權は神の立たまふ所なればなり是故に權に悖ふ者は神の定に逆くなり逆く者は自ら其罪の定を受くべしと又曰く爾曹主の爲に凡て人の立る所の者に服へ或は上にある王或は惡を行ふ者を罰し善を行ふ者を賞する爲に王より遣されたる方伯に服ふべし……神を畏れ王を尊ふべし(彼前二〇三十三十七)と其他わが子よエホバと王を畏れよ(箴廿四〇廿一)といひわれ殊に勸む萬人の爲に頌告祈禱懇求感謝せよ王及び凡て權威を有もの爲には別て之を行ふべし(提前二〇一)と曰ひ王とその子女の生命のために祈ることを得せしめよ(喇六〇十)と曰ふが如き皆國王方伯に服従すべき

を教へざるはなし、而して基督教徒が聖書を貴重すると如何を問へば、人生の財産生命に愈りてその教義を愛し、これに反かざらん爲には、生命を擲つを鴻毛よりも軽く、絶て悔ざりしもの古今數千萬なるを知らず、我國人と雖も亦全一の聖書を信ず、然らば此聖書に服従し、以上の主義を以て深く信仰上に薰陶せらるゝものにして畏おほくも、我が王家を瀆し我が國体を毀傷けんとするものあらんや、却て基督教の蔓延は國家と帝王に對する義務を知り、之れを行ふものをして多からしむるものと謂ふべし

論者もし之を疑はゞ、已に千有餘年來基督教の行はれたる邦國の盛衰隆替を見よ、彼の英國なり、獨逸なり、其他伊、埃、西、葡、米、魯等の如き、常に基督教の故に其内國の平安を破りたるとあるか、また今破りつゝあるか、基督教の名義を以て其帝王を顛覆せんと企てたるもの

あるか、國家の盛衰王室の隆替固より歴史上に顯然たり、殊に歐洲各國は戦亂を以て歴史の紙面を充すと謂ふべし、然れども是を以て漫に基督教に歸せんとせば、東洋の戦亂を以て何に歸せんとするか、彼に不忠の臣あれば直に目して其罪を基督教に歸せんとす、此に叛臣あれば論者はこれを以て何に擬せんとするか、事の是非に係らず、かく基督教にのみ重を歸せんとする論者の心は、却てその教に價値をますものにあらざるか、英國女王は今日自國の隆昌を以て聖書の功によることを自信し、これを人に語りたりと云ふ、また英人が忠君愛國の語を苟もせざるは、彼等がその精神を養ふ所深きを見るべし、彼等はこれを口にすると能はざるにあらず、これを知らざるにあらず、眞にその價値を知るに至れるなり、茲に一の美例あり指を屈すればは、や十餘年の先なりき、英國女王ヴクトリア一日某地に行幸あり、還御の際乗車せんとし、過て其一

足を蹠躓き地に仆る時に女王は足傷と肥大なるにより俄に立つと能はず自ら以爲く、もし人々をしてこれを知らしめば、彼等の驚愕いかならんかど、強て馬車を下らんとせしに、歩を進めがたく、今や隠蔽すべからざるを知り、二三の女官に扶けられて王宮に入りたりしに、其事頓ち四方に流傳し、女王の御怪我如何あらんと其騒動一方ならず老幼男女東西南北に馳奔まはり、宮内省に馳するものあれば、警察署に問ふものあり、市中の商店多くは戸を閉ぢ業を休み、相會すれば女王の容軀を問答し、宮内官吏と知るときはその袖を牽てゆかしめず、その周圍人の山をなすばかり、彼知らずと云はゞ代るゝ強問し、其迷惑云はんかたなく、其騒動は雷に英京のみならず、國中は云ふも更なり、ウエールスコットランドアイルランドに至るまで電報に接したる都市町村皆同様の騒動をなし、その確報を得ざるか爲に其騒動は次第に喧しく、何の時底

止するを知るべからず、警視總監はこれを棄置かたしと思ひけん、急ぎ宮中に趨り親しく女王の容軀を伺ひたるに、固より一時の微傷なれば、今はすでに平生どさしたる異なるとなきをきゝ、直に各警察署中に電達し女王の御怪我幸に微傷にして今は平生と甚ぶ異なることなき旨を諭したれば、署前山をなしたる臣民も門頭にその諭告を見るに至り、一時に帽を脱ぎ、國風として手巾を高く振り、女王萬歳、グクトリア萬歳と連呼し、互に相散じ、今まで心痛の眉を擧めたりし國民は、初て安堵の思をなし、歡聲四方に湧き、國中萬歳を祝したりと云ふ、視よ杞憂家よ、これをみよ、英國は基督教國なり、其人民は基督教中に教育せられ、養成せられたる人々なり、又英國帝王はその國に君臨したるは我國朝二千五百有餘年、皇統連綿たるの比すべきにわらず、而るに人民の王室を思ふ此の如き美風あり、この美風にして基督教主義の養ふ所たりと

せば豈ひとり我國のみ反對の結果を生ずべしと謂ふを得んや、論者が愛は畢竟基督教を誤認するに由る、キリストが「爾曹は聖書をも神の能力をも知らざるに由て謬れり」と云ひ玉ひしは、獨り「サドカイ」人のみを戒め玉ふたるにあらざるなり、わゝ杞憂家よ、舊慣妄見を去り虚心平氣を以て聖書を研究せよ、公平の眼を以て基督教會を觀察せよ、必ずや大に悟る所あるべし、かの忠君愛國を漫に口外する徒輩は果して其の精神と實行とあるか、常に帝王の爲め國家の爲め神にその幸福安寧隆昌を祈るものは誰ぞや、叛亂争鬪の國に興らざらんとを願ふものは誰ぞや、吾人は我 帝室に對し畏れ多くも忠且義なるは敢て他人に譲らざるべし、唯忠君は我教の専有物なりと主張せざるが故に、我のみ忠義なりと云はず、又我教に冠らするに忠君の文字を以てせざるのみ、これのかの漫に其名を楯とするものに比すればその差違如何ぞや

第二 基督教は外教にあらず

今より十五六年前佛者は基督教の傳播を妨げんとして、基督教は外國の教法なりと主張して止ざりき、而るに外國の教法と云はゞ獨り基督教のみならず、佛教もまた我國に起りたるにあらずして印度國に起りたるものなれば、其論鋒は却て自己の論城を破りたるものとなれり、故に爾後容易にこれを口にするものなかりしも、人心の變遷は世とともにかしうつり、近頃國教を定めんと主張し、何百年以上國內に行はれ、何百萬人以上の信徒を有するものにあざれば、其資格なきものなりと、漫に規程を作り、暗に基督教を退け、自己の宗教に勢力を添へんことを謀りたるものありと云ふ、愚妄もまた甚しからずや、畢竟その精神はあくまで基督教を以て外教と見做の弊より來れるに外ならず、これを思ふは嘗に彼徒のみならず、智識の發達未だ我國舊來の慣習の外に達せざ

るものはまた皆この念あり、殊に田舎僻遠の町村に至るときは、此思想を抱くもの今なほ頗る多し、かの府下有名の一にある報知新聞は、十年前にありて、耶蘇教は歐洲の産なりと論じたとありき、然らば五年十年開明に後れたる地方にありて、此謬見を抱くものあるは決して無理ならざるべし

然りと雖も吾人の見る所、教法に内外の區別をなすべき理の決してあらざるとと思へり、何となれば教法なるものは人心の罪惡を洗滌し、罪惡によりて生ずる畏懼の念を去り、罪惡に沈淪したる者に赦免を與へ、安心立命の道を得、永遠の幸福なる生命を得せしむるものなればなり、夫れ人は四百四病の器にして、疾病あらざる者は殆ど稀なり、その病ありや、人は必ず藥を用ひ、肺中に生じたる不平均を醫し、以て恢復するを、つとむべし、而して其藥石と治療と攝生とよく其道を得たらんには、

疾病は本復するを得ん、然り而して我國從來の漢法煎藥の廢れて、洋法水藥の漸次普く行はるゝは何ぞや、水藥は洋風にして外國の法たらざるはなし、昔これを惡んで、今これを好む、これその治療法の當を得て其功あるが故にあらすや、其他物理化學天文地質の如きを見るに、外人の發見したる眞理はまた我國のみならず、萬國に通して應用せられざるものなり、其應用し得べからざるものなきは、其發見したる所自然の法則學理に齟齬なきが故にあらすや

例へば爰に熱を病める者ありて、英國の醫師を招きて診察を請ふとせん、その外醫は生理病理藥劑の諸學理によりて得たる知識と經驗とによりて、キニーネを投じ、其熱久しからずして平温に復したりとせんか、其理蓋し英人の身軀も我國人の身軀も同じく天然の法則中に造られたればなり、又此處に一の物体あり、獨逸國の化學士をしてこれを分析

せしむるに、その法たる彼が獨國に於て學び得たる法則を以てよく之れを分析し得て誤りなかるべし、然らば眞實にして偽なき教法は人間道徳の規法として、内外の區別をなすべきものにあらざるや明なり。夫れ人の發見工夫にても眞理を得偽と誤となかりせば、内外古今に於ても相違するとなきは前に論じたるが如し、然らば進で宗教の宿るべき人心を見よ、其住する經緯度又は習慣の寒温によりて人により幾の差違あるべしと雖も、其性質人間たるに於ては決して異なることなし、我國人が泣く所には洋人もまた泣かん、歐米人が憂ふる所は我國人もまた憂へん、吾人罪惡を痛み惡む心あれば彼等もまたかくの如くなるべし、既に人心人情殆ど同一にして、また人心の向ふ所を察すれば、人間の罪惡を去り、安心立命を與ふる宗教に於て、何ぞ内外の別あらんや、人身の構造同じきが故に醫術の理も亦内外の別なきにあらざるや、人間の

道とする所理とする所も既に此の如し、況や天の人に示したる宗教に於ておや、されば論者の研究すべきは何れの宗教が眞實にして眞に安心立命に達せしむべきやにあり、否基督教は眞理の教なるや否にありて、内外如何の點にあらざ、佛法は印度に起れり、人これをよしとし、これを信すれば、その人にありてその教となる、儒道は支那の産なり、然れども我國人これを學べば、取て以て日本の學となすを得べし、基督教は亞細亞州なるユダヤより始る、其源は神より出たり、吾人これを信すれば、吾人の教なり、何ぞ宗教に内外を別るとをなすべけんや、これを外教と思ふものはよろしく聖書を研究せよ、思ひ半に過ぎん

第三 基督教信者は外國崇拜者にあらざる

基督教信徒が多くは歐米人より道を學ぶと、又歐米人に親しきとによりて、世人中信徒を目して外人崇拜者なりと云ひ甚しきに至りては外

人の婢僕視し、又一朝外國と事ある時に當ては皆國に反き卒を倒にし
 て我敵となるべしと云ふものあり、基督教と教會とを知らず、外觀の推
 測を下すときは此の如き謬見も或はおこらん、然れども吾人教會内に
 あるものは決して然思はざる也、吾人固より博識高德なる外國教師を
 貴むと共に博識高德なる我國人をば特に敬愛す、吾人外人を師として
 道を學びたらんには彼に師たる尊敬を加ふ固より不可なかるべし、も
 し我國人の我に師たるものある、如何ぞ師弟の務をかくべけんや、是れ
 人情義務の然らしむる所にして決して怪むに足らざるなり
 然れどももし外國と事あるが如き不幸の日あらば、吾徒は忠君愛國に
 於て他人に譲らず、大義名分を辨知するに於ては、決して他人に劣るべ
 からず、否劣らざらん覺悟也、假令ひ敵中百千の師ありと雖も、公戰にあ
 りて何の憚る所かあらん、臣民の義務を盡さんには臣民の義務を知り

て行ふ力なかるべからず、歐米人が國の爲め君の爲め盡したる忍耐と
 勇敢とは異教徒も賞嘆する所ならずや、彼等は何によりて此の能を養
 ひ得たるか、我が基督教にあらざして何ぞや

又魯國中興の名主ときこえたるピートル大帝の遺訓を以て大に心に
 介するものあり、其言をきくに曰く、他國に教法を弘め、旁ら敵國に味方
 を造るべし云々の言ありと、吾人は其言の眞偽を知らず、又その遺訓の
 有無だに知るによしなし、然れども吾人豈敢てギリシヤ教徒の辨護を
 なさんとするものならんや、予一個の見解を以てすればピートル帝は
 此の如き遺訓をなすは暗愚なる人物にあらずと知る、彼は世の稱道
 するが如く深謀智略衆に優れたり、此深謀あり、此智略ありて、何が故に
 此の如き遺訓をなして將來敵國を起さんとする愚に倣はんや、此の如
 き妄想は俗に所謂英雄は宗教を假用すとの轉用と恐怖心に出でたる

ものならんか、もし百歩を譲りその事ありとするも、かの教會にしてその遺訓を守り、外國信徒をして其味方たらしめんとするが如きとあらば、世は如何に澆季混濁の極に沈みたりとも、何の國民かその帝王を忘れ、その國を棄て、その父母に背かんや或は更に大義の存する所をも知らず、彼に教唆せられて自國の反臣たらんとするものあらんか、是の如き人物はかの教會にあらずとも、決してその國の忠臣にはあらざるなり、假令ひ此の如き教徒は億萬を以て算ふべしと雖も恐るゝに足らざるなり、此に忠臣ならざる者いかにしてか彼に忠臣たるを得ん、もし此の如き者をして忠なる所以を知らしむ者ありとせば、これ彼等を感化したるは、その遺訓にあらず、キリストの遺訓なり、聖書の感化なり、聖書の感化キリストの遺訓はこの世の國に非ず、もしこの世の國に能力を與へたりとせば、これ其愛國心を盛にするに外ならず、論者もしキ

リストの遺訓にして超然萬國の上にたち、聖書の感化にして嚴然人間をして嚮背する所を知らしむるものなるを聞き、猶かれらの國王の遺訓に忠ならんを憂ふるならば、その遺訓を反復論辨するが如く、聖書を熟讀玩味せよ、疑團それ必ず氷解せん
殊に神のものは神に返し、皇帝のものは皇帝に返すべし、路二十五の主の遺訓は、政教の分離を教ふるものにして、論者もなほ注意を要すべき所なり、今もし基督教の教師何百人我國に來りたりとも、彼等のうち自國の帝王の使命を奉じて來るもの一人もあらざるなり、彼等は諸王の王主の主なるキリストの使命を奉じてその福音を傳ふる職分ある者なり、彼等にしてもし其職分を破りたらば吾人鼓をならして彼等を攻むべし、何ぞこれをなすに遅々せんや、故に彼等は善惡是非に係らず、政治を談論せるものにあらず、道德上忍びざる所なれば其本國政府に對

して請願する所なきにあらず、彼の印度又は支那に在留する宣教師等が連署して阿片貿易の不正を惡み、英國政府に建言したるが如きは其類なり、固より某國に於て宣教師を暴殺したるが爲に、其本國より問罪の師を出すが如きとい、宣教師なるが故にこれをなすに非ず、その國民を保護するは政府の職分なり

既に此の如くなれば、數萬の外國教師國內に入り來りて教をなすとも固より怪むに足らず、憂ふるに足らず、却て國民の幸福の爲め悦ぶべきことなり

然れども又或は疑はん、何の爲に大金を費し、其本國を去り父母を離れ、我國にその道を傳んとするや、よし傳へ得たりとするも其得る所其失ふ所を贖ふに足らず、これ他に隱謀密計のあるありて然るにあらざるや、此疑問の如き予が現に屢く受けたるものなり、もしそれ外國傳道會

社が數萬の金銀を投じて、我國中に信徒を出を見て、其の傳道會社の因て起る所以を知らざれば、その疑惑となすまた免れがたし、然れども決して論者の愛ふるが如きものにあらざるなり、抑も外國傳道會社なるものは政府の立る所にあらず、又株主等ありて一年何割など云ふが如き利を得る目的を以てしたるものにあらず、神を信じキリストの救拯を受け神を愛し、人を愛する所のものが、未だ神の道を聽かざる人の爲に此會社を建て、或は傳教師を養成し、或はこれを海外未信國に派遣し、或は男女の學校を立て、或は書籍を出版するものに外ならず、然り而して其國に土着の傳教師起り、其國の教會獨立し傳道者の養成教會の維持傳道者派遣の事等爲し得るに至らば、彼等固より喜んで他の新地開拓に従事すべし、是れキリストが其弟子に爾等往て萬國に福音を宣傳へよ、可十五と命じ玉ひし遺訓を守るものにして、神を敬しキリストを

愛し人を救に導かんとするの衷情より出るなり、なんすれぞそれ他意
あるべけんや、もしそれ基督の弟子が世の進歩改良に熱心なると、罪惡
汚穢の慘狀より人を救はんとする熱望を知らば、傳道會社の起る決
して怪むに足らざるなり、彼の萬國同盟平和會の如き萬國禁酒會の如
き赤十字社の如き、其性質よく相似たるものにして、傳道會社は更にこ
れに神聖なる所あり、然らば數千萬金に對して得る所其資を贖ふと能
はざるも固より世の商法的の思慮を以て見る所にあらず、長く忍びて
其地の爲に盡力す、彼のハワイ島の如き其例を見る、初め此處に傳道し
たるは米國の傳道會社なりき、而るに今日其國の傳道漸く隆盛なるを
以て外國派遣の人々は漸く本國に歸り、或は支那日本に移れりと云ふ、
我國にしても、他を借るの必要なきに至らば、彼等は喜でその父母の
國に歸るべし

古昔漢學盛なりしと雖も、支那に味方したるものあるか、佛敎行はれた
りとも、印度に歸化したるものあるか、況んやキリスト敎の本國はア
洲中ユマヤ國にして、其國民の跡なきものに於てをや、況んや基督敎
義は人をして外國崇拜の如き偏僻の道を教ふるものにあらざるをや、
況んや吾人はキリスト信徒として、萬國の上に超然し、天國の民たるも
のに於てをや

第四 基督敎は不孝の敎にあらず

基督敎に反對する人の言に、基督敎徒は父母を敬はせ、列祖を尊ぶ、これ
必ず基督敎が孝順の道を教へず、寧ろ不孝に導くものにあらずやと
此論者が人倫を重するを見れば、吾人は決して彼を以て異主義のもの
となさず、彼も亦我黨の人なり、然れども憐むべし、その見る所また吾人
と大に異なりて、基督敎を誤解するを、論者は未だ聖書を手にとりてこ

れを閲しことなきか、古昔全能の神たる主がイスラエル人に與へたる
 十誡中、汝の父母を敬へ」と出二十録されたるを讀ざるか、此誠命を引て
 偽善者を詰責たるは、主イエスにあらすや、可七〇九又此誠を以て教會
 の子弟に教へたる聖パウロの言を見よ、彼は「爾曹主にありて兩親にし
 たがふべし是合宜なれば也」一非六〇と云ひしにあらすや、論者もし是等
 の訓誡を知らざりしならば、則ちこれによりて悟るべし、もしこれを知
 りてなほこれを疑はば、論者の所謂孝順の道とは果して何ぞや、或は論
 者は聖書が小學論語の字を飾り句を麗し、反復教ふるが如くならざる
 を見て、孝道を忽にするものとなすか、聖書は多言を以て人に教へたり
 となすものにあらす、父母を敬へとの一句は孝道一切の義を含むもの
 と謂ふべし、これを以て足らずとせば、孝の一字は何を以てよく論者に
 父母を敬ふことを教へんや

然れども基督教徒中其祖先の位牌を焼き或は流し、又佛壇を毀ち、又其
 父母の葬儀に會しなから、これに跪拜するをなさず、或は法筵に會し
 て禮拜をなさざるあり、是等の所爲は眞に不孝たるを免るべからず、祖
 先の祭祀は子に於て大典なり、而るをこれを怠らば孝と謂ふべけんや、
 子として其大典を忍ぶべくんば何を忍ばざらんや、基督教の教へに
 あるを以て、信徒また此の如くなるものにあらすや
 以上の論旨は吾人の屢耳にする所にして、蓋し世人の基督教を恐るゝ
 一因なるべし、此説を主張するものは皆に無學無智の輩のみならず有
 識の士にして往々此説を抱てキリストに従はざるものあり、故に少し
 くこれを論じて、其妄を辨するも無益にあらざるべし、即ち予が論點を
 二三の條項に別ち、左に一々これを列記せん
 第一、凡て人間の禮拜を要るものは唯神のみなり、神たらざるものに

神の外ほかうくべからざる宗教的禮拜しうきやうてきらいはいを行ふは神の禁きんずる所なり、即ち録りくして汝なんぢわが(神)面かほの前に我われの外何物ほかなにもをも神かみとすべからず一出しゅ三十とあるが如し、故に信徒しんとうが祖先そぜん或は死しにし人ひと(親)たりともを禮拜らいはいせざるは、わが親としてこれを敬うやまつざるにあらすして、拜跪らいかいべからざるが爲なり

第二、人の禮拜らいはいを受うくべきは獨神たかみのみなり、もし神ならざるものを拜すれば拜すべき神を蔑なげ如るなり、主イエスが獨主たかみたる爾の神に拜跪らいかいしこれにのみ事ふべし路申しん四〇八と曰ひ玉たまひしは、宗教的禮拜しうきやうてきらいはいの目的を教へられたるものにあらずや、それ夫婦の愛情あいじやうをさき婚姻こんこんの原理を破り、夫おとこもしくは婦つむぎにして他の男女だんなじよに通じたらんには、世間せけんこれを目してなにと云はん、主が屢々しばしば「姦惡かんあくなる世」の言げんを發し給ひしは、妻つまにしてその夫を夫とせざるもの、例れいをかりて、神に跪拜ひれふさざる不信ふしんの徒即ち他物たぶつに歸依きゐする人々を責めたる也、論者もし夫婦の間を知り、君臣くんしんの分を辨わきま

へ、以て神の事を思はゞ、宗教上禮拜ばそれ誰たれに向てなすべきかを知るなるべし

第三、凡そ人は如何に世よに大功たいこうを成したりとも、同じくこれ人なり、人は死ししたりとも同じくこれ人として死したるなり、其の人を以て神となすは果して死者しや祖先ぜんぜんを尊敬そんけいするの道なるべきか、彼等かれらにしてもし知るあらば彼等は喜よろこんでその神たる待遇たいぐをうくべきか、もしそれ吾人に對する敬禮けいらいの適あたふ者をば吾人喜よろこんで之を受けん、然らずんば吾人は其過あやま分の敬禮けいらいの却かへつて我を愚弄ぐろうするが如きを思ふなり、昔むかしコルネリヲなる人聖せいペテロに逢あひ其足下あしもとに伏ふしたるとき、聖せいペテロ彼に謂て曰く起たよわれも人なりと、また聖せいパウロ等らルステラに至りしとき、邑人まちびと舉あげて彼を祭まつらんとしたるとき、彼衆多あまを戒いさめて曰く我儕も汝曹なんぢらと同情どうじやうを有ありなりと、生せいにして此の如くんば何ぞ死しして神たる禮らいをうくべけんや、またこ

れをなすべけんや

論者應て曰ふ吾人はこれを以て人となすにあらす死して神と祭り佛と崇むこれに拜跪するまた可からずやと是れ神の神たるを知らざる也彼等が所謂神は誰の爲に神たりしか人によりて神たるを得しか死は其人を神とせしか人によらば事ふるものゝ能による也死によらば我儕と異なる所なし且つ論者は何の目的を以てこれらを拜すべきか吾人は其理由を知るに苦めり

第四、論者は死者亡靈の爲め讀經祈禱するを以て祖先父母に事ふまつる大禮となすか大凡人間の未來の禍福は生前の心實行爲の如何によりて定る者なりもし死後其人の爲に冥福を祈りこれにより極樂淨土に至るべしとせば世にある時に當りて神明に祈り佛を信するをなすの要あらんや人間來世の榮辱現世にありて早く其因を作る者なれ

ば吾儕が祖先の至りし處は天堂地獄の中孰れか一にあらざるべからずもし不幸にして地獄に至るべきものなればこれが爲に天堂に往くを願ふも或は子孫たるものゝ情なりとして止むども此の如きものを神佛視して合掌禮拜するは抑々何ぞや況んや孝道は生者にありて死者にあらざるものに於てをやもし祖先亡靈の幸福をますことを得る道あらば吾人は何によらず晝夜涙を流して祈禱するも何の厭ふとかあらん然れども吾人はその生前にわが孝道を完ふせずんば何時かよくこれをなすべきを知らざる也

以上の諸點は祖先を神としてこれに事ふべからざるとの大要なり然れども吾人はこれを永く敬愛すべからずと云ふにあらす寧ろ敬愛の一事に至ては猶生に事ふるが如くならんとを要す而して生に事ふるには身体を毀傷せざるも遠く遊ばず遊ぶに必ず方あるも父母死して

その道を改めざるも、召されて唯々たるも、父母老ひ家貧ければ、事ふるに祿を擇ばざるも、身を立て道を行ひ、名を後世に擧て以て父母を顯すも、擇ぶ所にあらず、苟も彼等を愛し、彼等を敬ふ道あらば、以て彼に事ふべし、吾人は父母と共にあり、共に食すとも、禽獸と相去る遠からず、これを敬ふを知つて、始て其禮ある也、孔子も既に此の如く教たり、吾人常に之れが爲に感ず、然れども、彼は何の道によりて、敬禮を思ふか、もしこれを以て天道と云はんか、天道を識るものは、孝を識る也、孔子の天道は、漠然として知り難きも、人これによりて、その孝道を怪まず、聖書の神性を人間に示すと、最も明瞭にして、人はこれに孝道なしと云ふ、誣るも、妄も亦甚しからずや、且つ主は吾人に神を指して、何と云ひしか、これを見よ、天の父と云ひしにあらずや、天の父に従ふもの、地の父を敬せざらんや、故に聖パウロが「主にありて、兩親に従ふべし」と云ひしは、天の父に順な

ると、地の父に孝なるとは、兩から相よるとを謂ふ也

第五 基督教は無氣力の人を造らず

人或は曰ふ、宗教を信すれば卑屈になると、何が故にこのとを云ふか、自己の自由とする所を束縛せらるゝが爲なり、彼の思念と言行とは、神の道德法と背反す、彼れ強てこれに従はん、とせば、怡も木框中に箱入せらるゝの如も、ひをなす、而して絶て自己なさんとすると、撞にすると能はざるなり、彼またその法により、人に對する義務を盡さんとすれば、故なくして兄弟、他人を云ふに、怒るべからず、人もしその右の頬を打ば、また他の頬を轉らしてこれに向け、三五〇或は其仇を報ふべからず、……その仇もし飢なばこれに食はせ、十羅九二十などするが如きは、最も彼が平生の思念言行を緊束するものとなる、故に彼より道德家を見るときは、常に戰々競々として、深淵に臨むが如く、薄氷を踏むが如く、一舉手一

投足の勢だに苟もせざるが如きは、頗る卑怯不活潑たる觀をなすべし、是を以て彼等またこれを評して曰く彼が道德は高しと雖も、頻繁錯雜なる世の大波瀾に處すべき英斷勇氣なしと然り宗教的信仰と智識を過りて、迷信迷愚に陥らば、或は人により遁世主義となり、或は廢物同様とならん、然れども基督教は最も迷信迷愚を惡んで、これを神の智慧に導かんとするもの也、論者が卑屈無氣力を論破するは猶可なり、然れども血氣の自由に傲はざるを冀むに至りてはこれを論誅せざるべけんや、彼等の心意を察すれば吾人信徒が無氣力なるが如く見ゆるは、粗暴なる世人と共に粗暴なることをなさず怒り易き世人に倣ふて怒らざるが故なり、もし果して然らば論者の見て以て無氣力卑屈となす所は、吾人信徒の却て勇氣活潑なりとなす所なり、何となれば基督教に屬するものは世俗的肉欲的より離れて神に屬す

るものなればなり
抑論者は自己の意志の向く所に従ふて自由を得たりとなすべけれど、其意志にして始より罪惡に役せられたらんに、其自由は罪惡の奴隸たるにあらすや、彼等の自由果して何處にあるか、彼等は權利を口にして忽ち平等なりと云ふ、人權固よりしからん、然れども靈魂上既に神より與へられたる權利の剝脱をうけたるものにしてよく自由を得たるか、吾人は信ずるによりて其權利を復興へられたるものなり、罪惡より自由になりしものなり、この權利自由は精神上に屬す、故に外にありてもこれを保護伸張するを得、唯その度量の大なるが爲と責任のありを知るが故に、徒に自己の自由權利を主張して人を妨害するにあらんを恐るゝのみ、視よピラトの法庭にて兵卒に毆打せられしとき、彼等を詰りもし善すば其善ざるを證せよ、もしよくば何ぞこれを打つやと

はイエスの言なり、又聖パウロ等はユダヤ人に捕られしとき、彼等集りて彼らを鞭ち牢に繋ぎし後、彼がローマ人たるを知りて隠に出さんとしれば、彼彼等に謂て曰く「我らローマ人たるに罪を定ずして公然に我らを杖ち且獄に入たり而して今ひそかに出さんと爲か宜らす彼等(上官)自ら來りて我儕を引出すべし」と、是皆自己の權利を主張したるものにあらずや、苟も此キリストの教を奉じたる此聖パウロにならふもの徒に自己の自由權利を棄る理あらんや、かの米合衆國を視よ、人權自由の尊稱を得たる國となりし、此氣象の發生を問へば、眞理は爾曹に自由を得さすべしとの聖言に出たるものにして、喜ぶ者と共に喜び哀む者と共に哀まんとする偽なき愛心の力なりと、此の如き眞正の勇氣は忍耐を生じ、千挫萬折患難辛苦も彼等の自由を奪ふと能はず、其精神氣力を獲ふ即ち公義名分に勇しき精神は深く養ふ所あるによらざるべから

ず、吾人は血氣にはやり俗世の事に濼蕩なる者が常に深沈大度の精神を養ひ、一朝機に當て活潑不撓の勇氣を發すとを得るや否を疑ふなり、嘗て聞く米國獨立戦争のとき、或人ワシントンの大將たるを聞き奇異の念を抱き、自ら以爲くワシントンは基督教信者に非ずや、彼自ら兵を率き敵と戦ひ謀略を以て敵を破る、其所爲敵を愛する者に非ずと一日屯營に近く至り、これを窺ひしに、ワシントン出て近林に入るを見たり、彼其跡を追ふて竊に彼がなさんとする所を窺へり、ワシントンは株根により跪き神に祈りをなしたれば、彼見て以爲く彼軍服を着け兵營にあり、彼今何を祈らんとするかと、身を樹陰に隠しこれをきけば、敵を愛する情言外に溢れ、涙を濺きて自國の利益敵國の幸福を祈りたるを知り、始めて敵を愛する本義を知り以て嘆賞したりと云ふ

吾人は米合衆國の獨立戦争にあらざれども、自己の獨立自由を完ふせ

んが爲に吾人を奴隸とせん、常に吾人を壓抑する罪惡と戦ふなり、吾人一身を亡すも罪惡なり、一家を破るも一國を傾るも亦罪惡なり、罪惡の力は實に強し、これと戦ふは實に忠ならずや、勇ならずや、これを亡は一身の自由を得、一家の平安を得、一國の權利を増進する所以なり、吾人既に自らこれを任ず、怯と呼ばれんも何をか憂へん、聖書に曰く、弱き所は却て強しと論者以て如何となす

第六 基督教は學問の敵にあらず

以上論じ來れる迷妄を破つて、少しく基督教に觀察を下したるものは、皆知るべし、基督教は善良なる教なり、勢力ある教なることを、然れども真正の宗教視せず、また宗教は普通の學理的なるもの、觀を以てこれを窺ひ、學問の道理を以て基督教に對照すれば、誤謬の點あるを免れずと思ひ、またこれを敷衍し、學問と並行すべからず、却て智識の壓抑をなす

が故に學問の妨害と妄信して、これを嫌ものあり、我は惡人なりとの異語別名たるをも知らずして、我は宗教外に逍遙すなど大言を吐て恬として恥ざるものあり、盲蛇ものに畏すとは、蓋し此類の人を謂ふか基督教が學問の敵にして智識の進歩を妨ぐると主張したる人々は、固より種々の點より論ずるなるべけれども、かのガリレオ氏が地動説を主張したるとき、教會は氏を目して異端者視し、牢獄に下したることを擧げ、キリスト教が直接學問に敵したるものとなせり、論者の如くガリレオ氏はこれが爲に入牢せり、然れどもこれを云はんとせば、先づ當時の事情を明にせよ、彼をして入牢せしめたるは、當時迷信誤認の極度に達したる羅馬教會なり、その教會がこれをなしたりとも、吾人は基督の道がこれをなしたりとすると能はず、主義と學説とは必しも一致すると云ふべからず、彼等の見る所或は學説と矛盾するとなきを保すべから

ず、此一事の如き基督教と學問と相争ひたるものにあらずして、基督教徒の謬説、不完全なる神學者の見解は學説と争ひたるに過ぎざるなり、もし不完全なるものを以てせば、學問が基督教を攻め、また今攻めつゝあるは明なり、不完全なる神學説が學説を攻撃したると、不完全不見識なる學問が基督教を攻撃したると、その攻撃に於て何の贅言を要すべけんや、もしガリレオ氏の一事を以て、宗教が學問を苦めたりと云は、余は學者が學問の新説を妨害したるとをわけんとす、プロイエンバール教會の僧官にして、天文の大家コペルニカスが初て地動説を主唱したる時には、教會のこれを妨げざるのみならず、却て其説を公にするのを助けたる程なるに、當時學者の攻撃甚しく、地動説を主張するものは世界を空中に飛ばんとする御者なりとの罵詈は、學者中の常語となれり、またニュートンの引力説もデカルト派より攻撃をうけ、ステフenson

の蒸氣車、コロンバスの西半球の存在説、ハービーの血液運行説、シユネルの種痘術、マードクの電氣燈等、其初より無難に信じられたるもの殆どなきにあらずや、かのドレーパー氏の宗教學術争闘史と稱する書の如きは、決して宗教學術二者の争論にあらずして、不完全なる神學説と不完全なる學説との争たるに過ぎず、何を以てか宗教は學問を敵視し、またこの智識を壓抑するものと謂ふべけんや、もし争論敵視の弊を舉れば、宗教は學問の敵にあらずして、學説は始終喧争をなしたりと謂ふべき也

近頃ラプラスの火雲説、ダーウソンの進化説等出て、學問の面目一新し、これが爲め輕躁なる學士は忽ち基督教の天地創造論、天地經營論等を視て一敗地に委したりと思ひ、喋々我教を攻撃して止ざるものあり、吾人は今日の火雲説を完全なるものとなすと能はず、進化説を以て悉く眞

實なりと信ずるものにあらざれども、斯の如き學說によるも天地創造經營論は幾分を解き得べしと思ふ、即ち地は定形なく曠空して黑暗滯の面にあり、〇創一とは、幾分か火雲説を以てこれを伺ふとを得べく、また天地創造の順序の如き、地質學によりして彌其信をおくを得べし、聖オーガマチン(紀元三百年)師父オリシン(二百年)の如きは早くより創造の六日を解して一日廿四時間となさずして、ある一時間となしたりと云ふ、然れども未だ猶明白ならず、千八百年代に至り地質學の新説おこり、愈その日とは時期の義なることを確信したるものあるにあらずや、以上論じ來れる所は固よりその一斑なれども、決してその學說と基督教とは論者の思ふが如く矛盾するものにあらず、却て符合する點の多きを見るべし、スペンサーが眞正の宗教と眞正の學術とは双生の姉妹なりと曰ひしは、誠に道理ある言といふべし

吾人は諸種の學術が宗教家即ち基督信徒中より發明せられたる實あるを知る、ニートンの學問は人のよく知るが如く、彼は宗教にありてもまた此の如し、コペルニカスガリレオフランクリンベーカーコンデンナコントウサネータムソントゴルウードロソンの如きもまた然るにあらずや、もし論者が思惟するが如くならば、此人々の心事は何を以てするを得べきや、もし論者にして學問は宇宙の事物を観察經驗するにより、進んでその原理を索り、勢ひ造物主の上に及ぶものとせば、吾人がその造物主なりと信ずる神より默示せられたる基督教にして、これを敵視するごときとあらんや、人智はこれによりて彼を知り、彼此相まつ所少からずるを知るべき也

第七 基督教の道徳

基督教誤解論者の迷妄に就ては既にその大略を辨じられたれば、猶一步を

進めて基督教道徳の要を述べんとす
 夫れ道徳の人世に欠べからざるとは、自ら人心に義務心の在るによりて知らるべし、人はこれによりて其徳をたて、家はこれによりて整ひ、國はこれによりて、盛に萬國はこれよりて和ぐとを得べし、唯これを開發する主義の異同あるによりて、其實行に異同を生ずるは止むを得ざる也
 然れども其標準を求めずして徒に其必要を論ずるは決して道徳の基礎實行を確固するものと謂ふべからず、古より萬國とも聖賢君子に乏しからず、彼等皆人間徳義の道を講ずるに孜々汲々として怠るとなかりしも、多くは人心に發する現象と、天地の大道とを推測して、その標準を立てたるものなれば、彼等のなす所は其規矩準繩を定むるより、事人世道徳を維持する道を講じて、僅にその腐敗を防に過ぎざりしものと

謂ふべし、然れども基督教の道徳は大慈全能全智の神を基とし、その神より與へられたる規矩を以て、吾人の標準となすものなり、而して其大要は吾人が所謂十誡なるものを以て知り得べく、またこれを分解せば神に對する務と、人に對する務との二に約るとを得べし、此誡は早くよりイスマエル人が神よりモーセを経て教傳へられたるものにして、人間の道徳律たる明なりしが、我儕の主イエスキリストの世に降られ、教を宣傳らるゝに及びて、愈その精神を明に知るとを得たり、即ち主が特に誠の首を示して、汝心を盡し、精神を盡し、意を盡し、主なる汝の神を愛すべし、これ第一にして大なる誠なり、第二もまたこれに同じ己の如く爾の隣を愛すべし、凡の律法と豫言者ハ此二の誡によれり、太廿二〇三と曰へるは、此誠の精神なり、されば天地人間道徳上我らの規律とするもの幾何あるとも、愛の一字を以て蔽ふとを得べし

然り而して其誠が吾人に要る愛の精神は、古來聖賢の説たる所と異にして、決して基督教外より窺ひ知るべきにあらず、吾人が主張する所は神の愛にして神より人間に要め給ふ所の者なり、神の愛の洪大なるとは、吾人固より萬物に徴してその幾分を知り得べし、即ちイエス吾人にその注意を促して曰く、夫天の父(神)の其日を善者にも惡者にも照し雨を義しき者にも義からざる者にも降せ玉へり四十五と、其言簡易に過ぐるが如くなれども、主がこれを曰ひ玉ふ、精神は無量の意を含めり、人はこれを以てその主義を漠然解し去つて意を用ゐざるべしと雖も、主が爾曹の敵を愛み爾曹を誣ふ者を祝し爾曹を憎者を善視し虐遇迫害者の爲に祈禱せよ四十四と曰へるは、彼の聖言により此の實行を要する者に非ずや、世人は既に愛の必要を知れり、然れども己を愛する者を愛するは博愛に非ず、惡人にても己を愛する者を愛する也、己に善を行

者に善を行は何の足るとあらんや、惡人も亦是の如く行ふなり、彼より報賞を得んとして彼を愛するは何の賞賜あらんや、惡人もまた償を得んとしてこれをなすに非ずや、世の聖賢中既に博愛の主義を講じたるものあり、然れども彼等は、その由て來る所を知らず、又これを世人に先つて實行し、愈其主義を明にしたる者なきなり、主は自ら能ざるを以て人に要めず、自ら爲すして人に強たるとなし、其愛を要する所に至つても、唯主の聖言のみに止らず、自ら神の愛をあらはさん爲に己を神に供へて絶て放縱なるとなく、剩へ人類を罪惡の塗炭中より贖はんが爲め、自ら罪なくして其身を十字架上に釘けて、其事を完ふし玉へり、その功績の絶大なるも、其愛心の無限無量とは、吾人の得て知る所にあらざれども、聖パウロはこれを述べてキリストは我儕のなほ罪人たるときわれらの爲に死たままへり、神はこれによりて其愛を彰し給ふ五と曰ひ

聖ヨハネは、主は我らの爲に生を捐たまへり是によりて愛と云ふ事を
 知れり。〇十約三と曰へるにより、吾人は其定義を明にすることを得たり、夫
 れ義人の爲に死るもの殆ど世に少なり、仁者の爲には死ることを厭ざ
 る者もやあらん、然れども其敵の爲に其生を捐るもの世間幾何かある、
 これをかの基督教外の愛に比するに實に霄壤の差も雷ならざる也
 大凡道德なるものは、己にのみ對する務にあらざ、また人に對するのみ
 にあらず、神に對する務を兼ね行ひて始て完全を得るなり、然るに世人
 動すれば神に對する感念を忽にす、何を以てよく神の愛を人に教ふる
 とを得べきや、名を博愛に託とあれども其實を得ざるもまた宜ならず
 や、吾人もし博愛の如何を知らんと欲せば、神の愛に來らざる可らず、イ
 エスキリストの愛に獎勵れてこれを行ふべき也、而してこれを行ふも
 のはキリストの弟子、天の父(神)の子たるべしと録されたり、既に世の父

子の關係にして人倫の大なるものなれば、天の父と我儕子たるものと
 の間に彰はるゝ愛に過るものまた他にあるべけんや、吾人は道德上人
 の我を罪するを憂へんより、寧神の誠に觸て罪に定られんことを懼るゝ
 也、然れども我ら自己の罪惡によりて既にその誠の定むる所となる、キ
 リストこれを憐て我儕を罪より救ひ我らに自由を與へ給へり、もしキ
 リストの愛にして律法を完全する力なくんば何我らを救ふとを得べ
 けんや、キリストの愛は既に我儕を罪より出したれば何れの誠か此の
 愛によりて行ふものを捕へて罪に定むるとをなさんや、吾人世に處す
 るに既に此の如し來世も亦此の如くならざらんや、聖書に曰く「此の如
 く我儕の愛全備を得て鞠日に懼れなからしむ……愛の中に懼ある
 となし云々」〇十約七と

且夫れ基督の愛にして此の如くなれば信徒は此の如く自己の完全を

以て満足するものにあらず、自己の完全は猶他人を愛するによりて完全なるなり、此れ已を得ずしてなすにあらず、基督によりて彰れたる神の愛によれるものは、勢此の如きに至る也、然るに世人が基督教を以て社會の平安を害するもの、如く汚名をこれに蒙らすは、果して何の心ぞや、今日口を開けば四海兄弟なりと云ひ筆を執れば人性の權利皆同じと云ふ、その言ふ所實によし、然れども何を以て四海兄弟なるか、父なければ兄弟もまたあるとなし、彼等は果して自己共同の父を知るか、吾人が所謂天の父を認め、これを愛する愛ありて始て父と云ふを得べし、又その愛ありて兄弟たるとを得べきなり、吾人は固より皆天父に造らるゝを以て神を父と云ふ、然れどもキリストの愛によりて再び神と交接して父と云ふ、豈それ愉快ならずや、然れば四海兄弟の義を解くものは基督教の外あらざるなり、兄弟の交をなさんとするものは、基督信

徒の外あらざる也、既に一家に父たるものありて其愛兄弟にあまねくして、一家は平安なるを得るにあらずや、万民もし唯一の天父を拜し、其愛を以て各自の愛とするとあらば、天下社會何事か安からざらんや、主イエス曾て弟子に語て曰く、人その兄弟の爲に生命を捐るはこれより大なる愛はなしと、主はその如く我儕の爲に生命を捐て、これによりて大なる愛を彰し給へり、是れ神の我儕に與へ給ひし道德律の成就を告ぐるものにて、吾人の道德をして完全の域に至らしめんと要する所に外ならざる也

啓蒙基督教概論終

明治廿四年六月三日印刷
同 年六月五日出版

定價金六錢

版權登錄

編輯人

太田孝吉

東京市日本橋區新
右衛門町四番地

發行者

池田平三郎

東京市麻布區飯倉
片町二十八番地

印刷人

三上春豐

東京市小石川區指
夕谷町十六番地

發行所

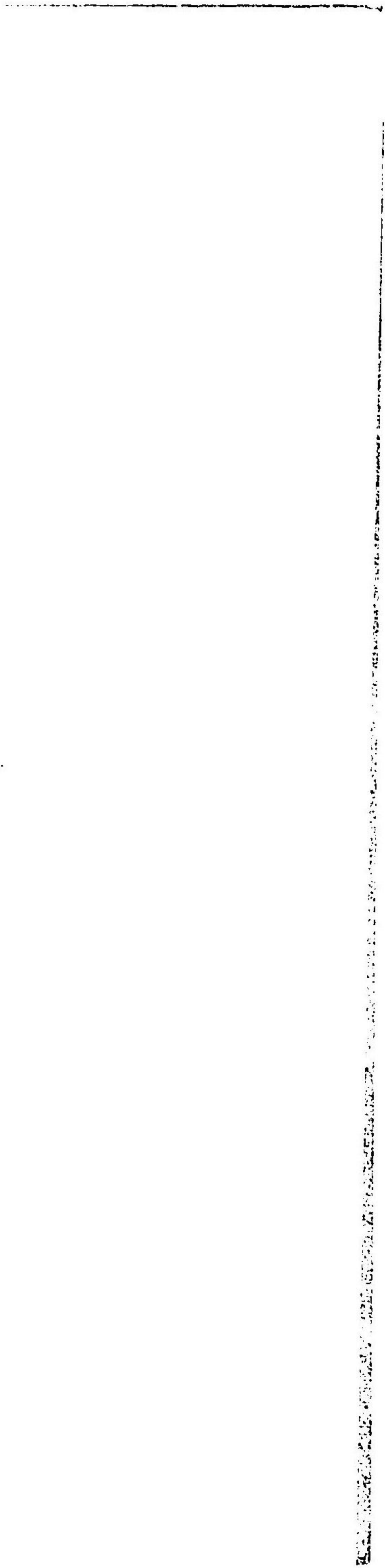
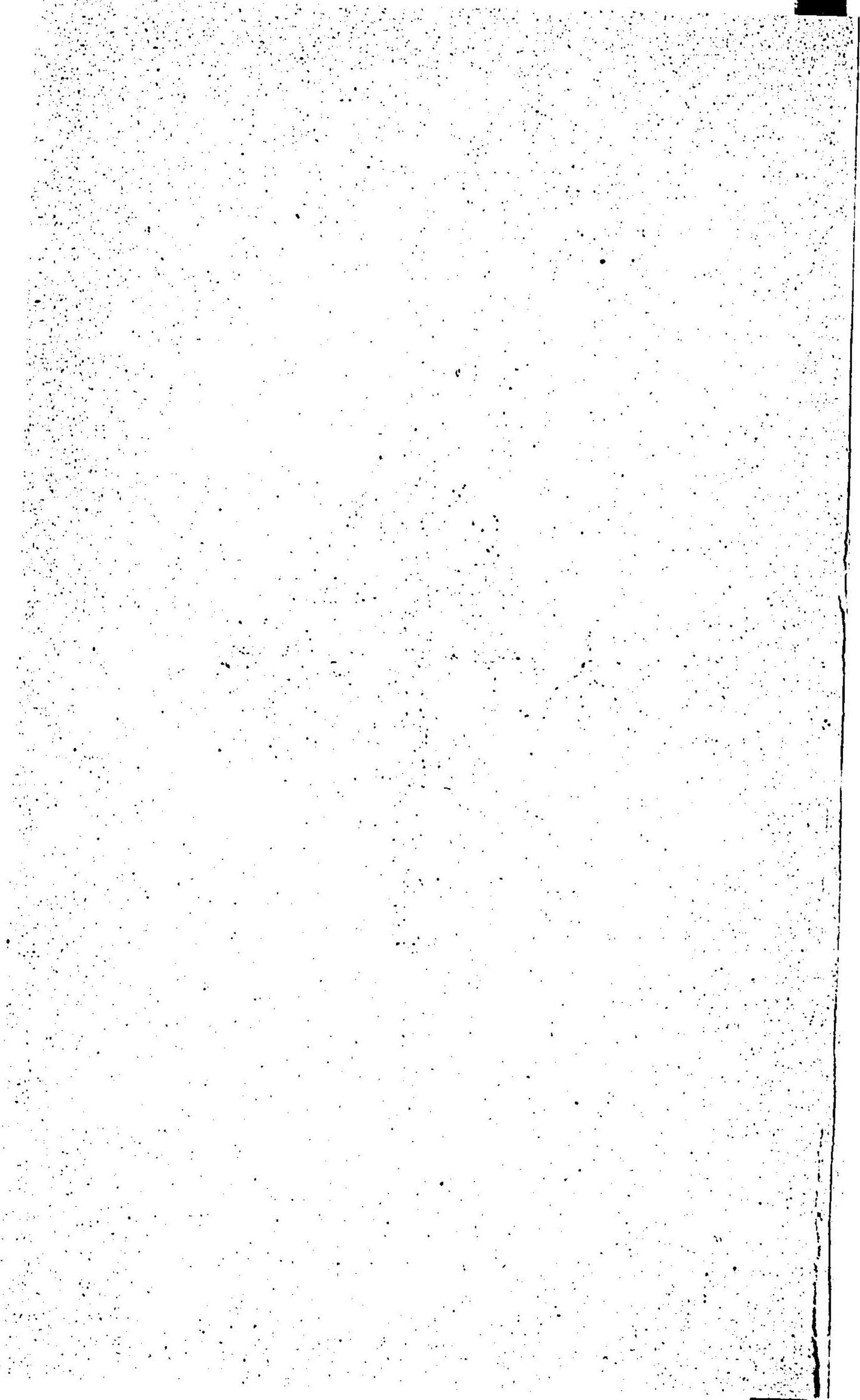
日曜叢誌社

東京市麻布區飯倉
片町二十八番地

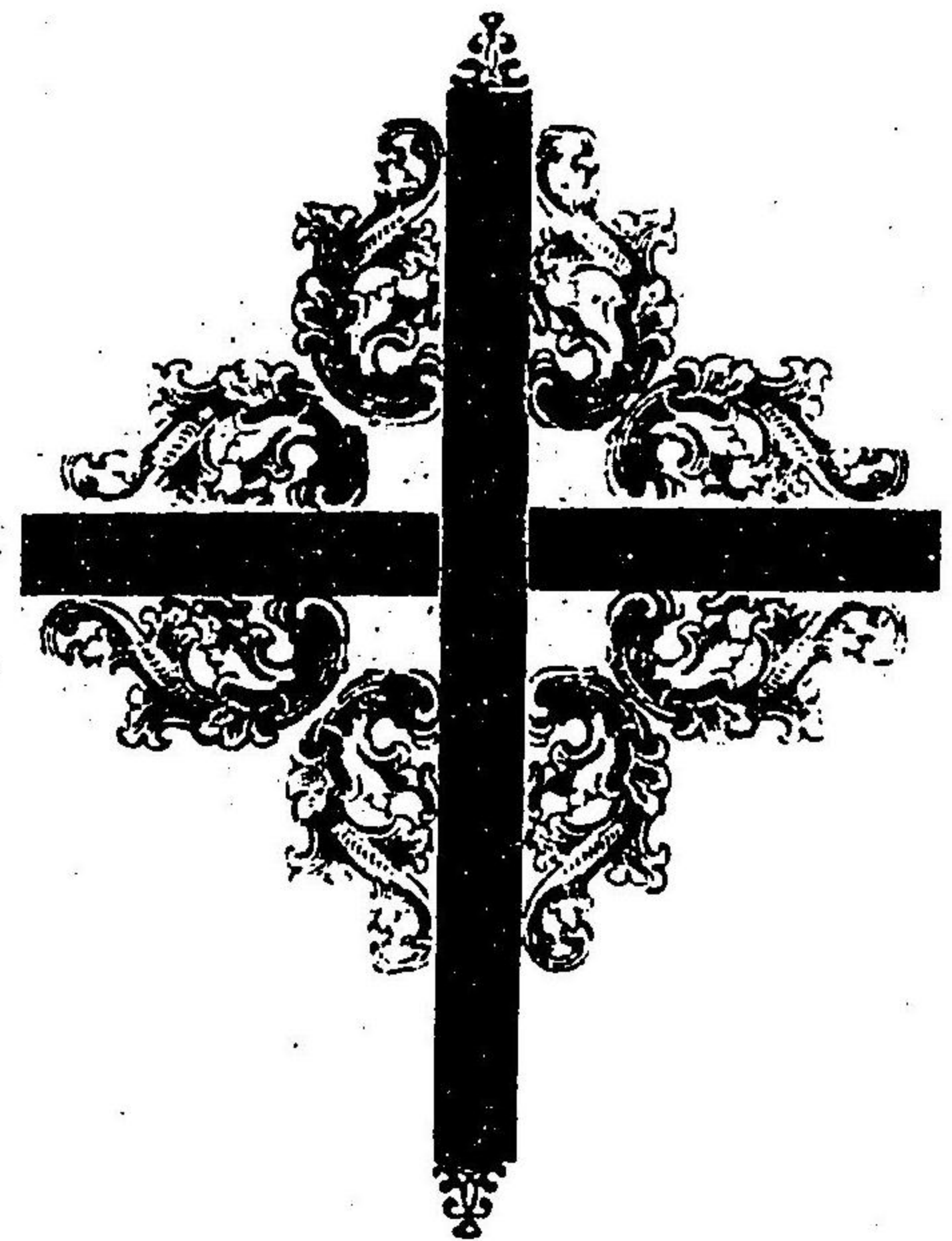
版權
所有

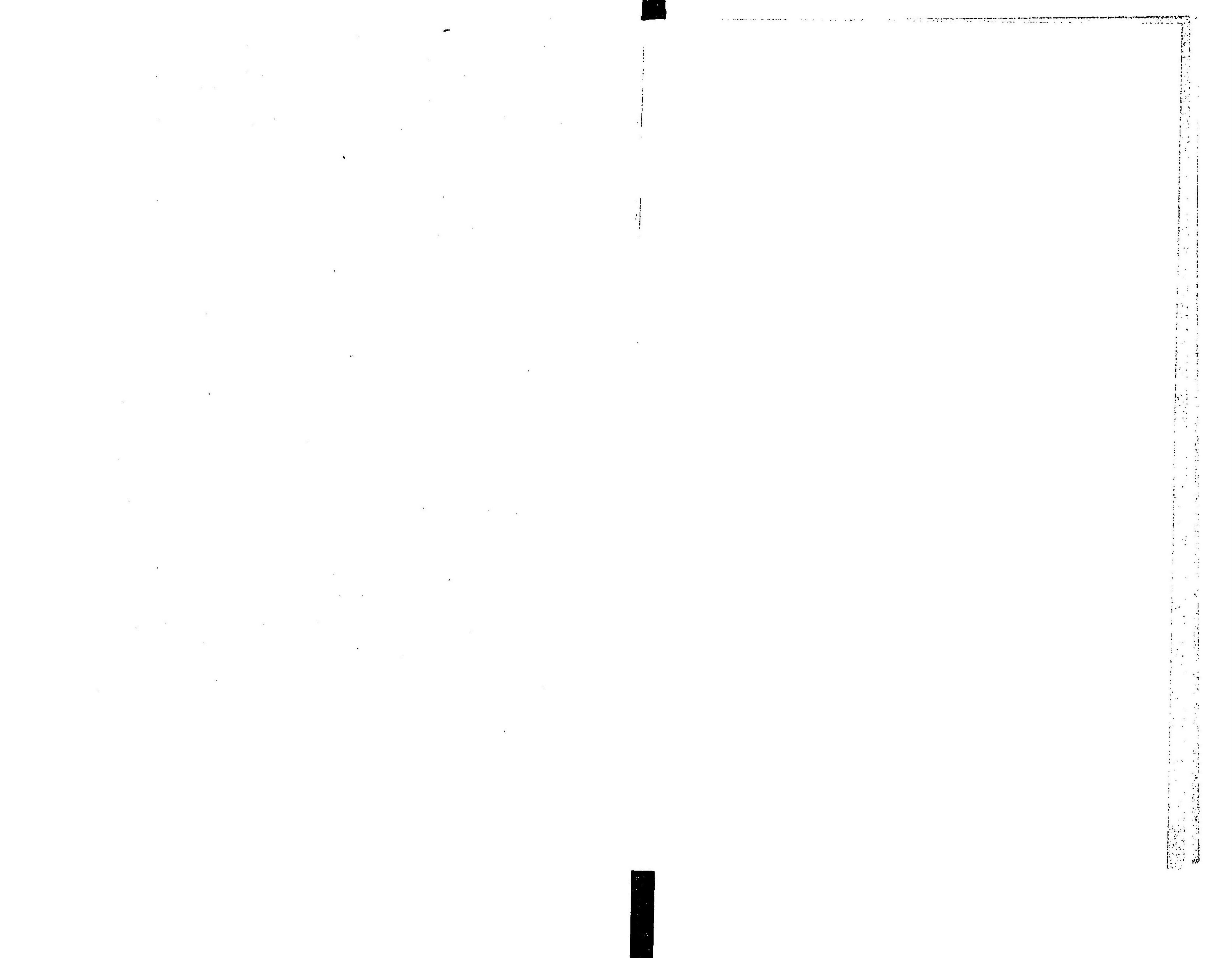
大賣捌所

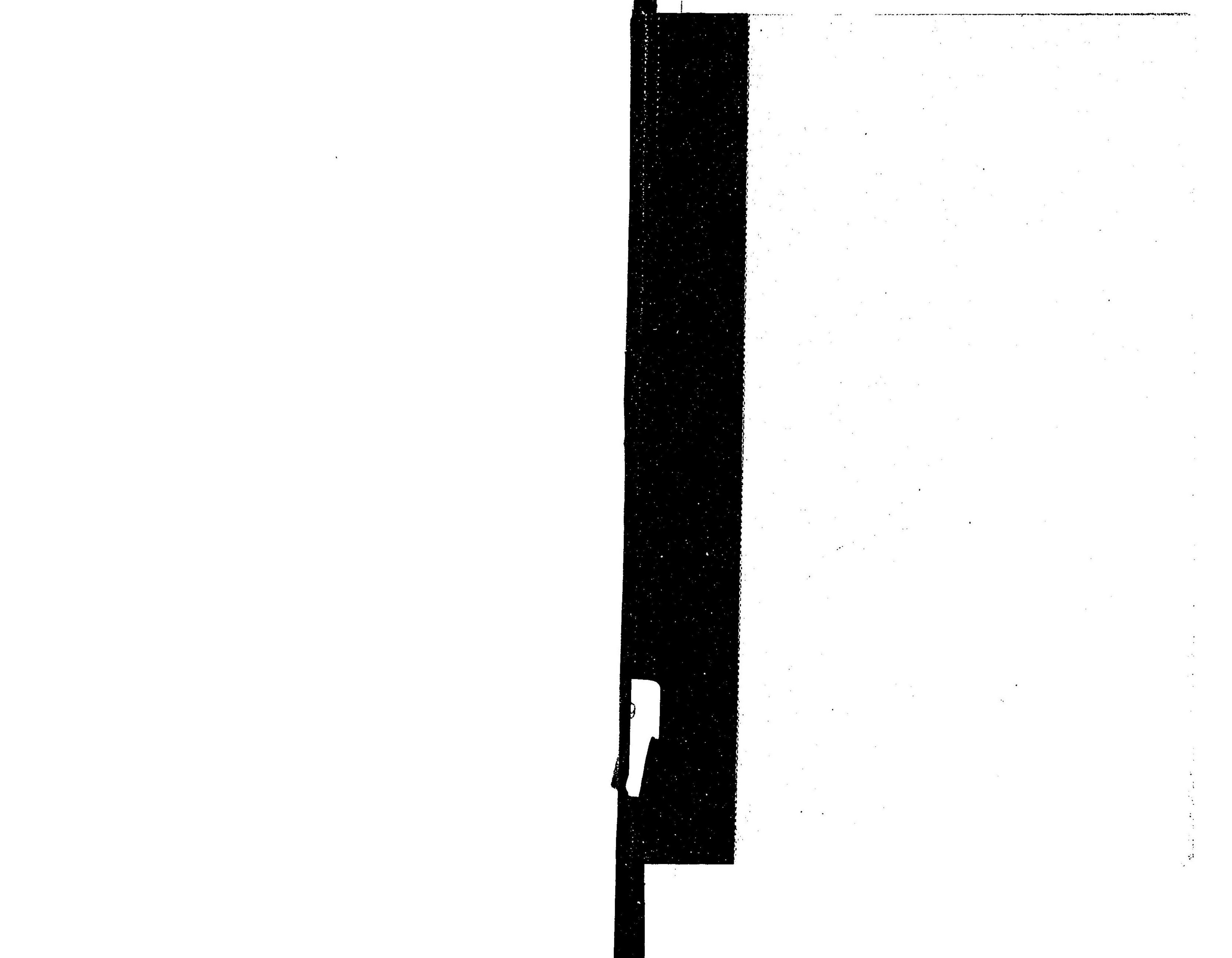
東京市神田錦町十字屋。銀座三丁目十字
屋。大坂土佐堀福音社。橫濱元町十字屋



ex 30







020437-000-1

特29-733

基督教概論 (啓蒙)

太田 孝吉 / 著

M24

ABI-0247



特

7



THE
REPUBLIC
OF
INDIA

MINISTRY OF
DEFENCE

OFFICE OF THE
SECRETARY

DEFENCE SECRETARIAT

NEW DELHI